

宗教画

2025.3.18

イタリアに限らず、ヨーロッパには宗教画が多い。ヨーロッパの絵画を学ぼうとすると、宗教画と古代の神話を学ばざるを得ない。ヨーロッパの近代以前の絵画を鑑賞すると、その大半が宗教・神話を題材にした作品だからである。もしかしたら、この宗教画や神話を題材にした絵画を、どのように鑑賞してよいのかわからない日本人が多くはないだろうか。

「ピエタ」という作品がある。ピエタとは、主にキリスト教美術における題材として、聖母子像のうち「死んで十字架から降ろされたキリストを抱く母マリア（聖母マリア）」の彫刻や絵画などの作品である。ミケランジェロをはじめ、ベリーニ、ボッティチエリ、ドラクロワなどが、ピエタを製作している。ミケランジェロは、ピエタを4体製作している。中でも、1499年に完成させたバチカンのサン・ピエトロ大聖堂にあるものが有名である。この作品は、ミケランジェロが署名を入れた唯一の作品として知られる。

バチカンのサン・ピエトロ大聖堂にあるミケランジェロのピエタには、心を奪われた。この世のものとは思えなかった。本当に人がつくったものなのか。これまでのものを人がつくることができるものなのか。ど素人の私が、食い入るように、しばし眺めることになったのだから、尋常ならざる作品である。

「受胎告知」もたくさんある。レオナルド・ダ・ヴィンチをはじめ、少なくとも14人の画家が描いている。受胎告知は、聖書における極めて重要な場面の一つであり、キリスト教を広めるために多くの聖職者および関係者が1000年以上にわたって発注し続けてきた歴史がある。描く画家と描かれた時代によって、だいぶ雰囲気というか味わいが違う。中でも、フィレンツェのウフィツィ美術館にあるレオナルド・ダ・ヴィンチのものが、一番好きである。ダ・ヴィンチに対する先入観があることは否定できないが、色合いや構図がいい。今にでも動き出しそうな絵である。受胎告知は、某イタリアンチェーンレストランにある絵といったほうが早いかもしれない。あの絵は、フラ・アンジェリコの絵が元になっている。

何故に、ヨーロッパの宗教画なのか。実は、日本のお寺や神社にある仏像やご神体のことを何も知らない自分がいる。年齢を重ねてきたせいか、神社仏閣への興味は増す一方である。にもかかわらず、知識がなさすぎる。これでは、いけない。興福寺の「阿修羅像」など、いつまで見ても飽きない。以前から、少しずつ仏教の勉強をしてきている。これからも精進し、弥勒菩薩と会話ができるようになりたい。